

## II-A-13 糖尿病患者の早期腎障害に対する 柴苓湯(TJ-114)の効果

横浜市立大学医学部病院 第三内科

○石原 学, 田中俊一, 山川 正, 早稲田愛生, 井上修二, 高邑裕太郎

目的：糖尿病患者治療上の重要な目標の一つとして、蛋白尿陰性例における腎症の早期発見と、その時期における治療の試みが挙げられている。今回、我々は高血圧など他に腎障害をきたす合併症がなく、尿蛋白陰性のⅡ型糖尿病患者で尿中微量アルブミンが持続高値を示した症例に対し、柴苓湯(TJ-114)を投与し、その治療薬としての有用性を検討した。

方法：蛋白尿など臨床上腎症を伴わず、高血圧などの腎障害を来す疾患を合併しない外来通院中のⅡ型糖尿病患者で、連続3回の尿中微量アルブミンが総て高値を示した32名を対象とした。経過中にHb-A<sub>1c</sub> または空腹時血糖が前値と比較して10%以上変動したものは対象から除外した。柴苓湯 7.5g/日を6ヶ月経口投与し、投与前、3ヶ月、6ヶ月後の各時点で、空腹時血糖、Hb-A<sub>1c</sub>を含む血液生化学検査、および尿中微量アルブミン、NAG、Cr、 $\alpha_1$ -microglobulinを測定し、比較検討した。

結果：尿中微量アルブミン・クレアチニン比は、68.1mg/g.Cr.(前値)、58.9mg/g.Cr.(3ヶ月)、24.7mg/g.Cr.(6ヶ月)と推移し、paired T検定を行ったところ、6ヶ月後の時点でp = 0.0428と有意の低下を認めた。尿中 $\alpha_1$ -microglobulinについては経過観察中に有意な変動は認められなかった。

考察・結論：蛋白尿を呈さず、尿中微量アルブミンが持続高値を示すⅡ型糖尿病患者32例を対象にして、ネフローゼ症候群においてその有効性が注目されている柴苓湯の、尿中微量アルブミン排泄に及ぼす効果を検討した。6ヶ月間、血糖及びHb-A<sub>1c</sub>が安定していたものは17例であった。尿中微量アルブミン・Cr比は6ヶ月後で有意に減少した。尿蛋白陰性のⅡ型糖尿病患者の尿中微量アルブミンにより示される早期腎障害に対して、柴苓湯は有効な薬剤と思われた。利尿作用、膜安定化作用などその機序については不明であるが、さらに詳細な検討が必要と思われた。